電子ブック選定の際考慮することがら：順天堂大学図書館での導入事例を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本医学図書館協会 公開日: 2024-09-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城山, 泰彦, 水嶋, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.60312/0002003697

事例報告

電子ブック選定の際考慮することがら：順天堂大学図書館での導入事例を通して

城山　泰彦[1)]，水嶋　直子[2)]

順天堂大学図書館

Ⅰ．はじめに

順天堂大学図書館（以下，当館）では“電子書籍元年”と呼ばれた2010年（度）に，電子ブックの契約タイトル数を増加させる取り組みを行った。導入のきっかけは経費面であるが，4キャンパスと6附属医院・病院を抱える順天堂大学（以下，本学）にとって，電子ブックの導入はメリットが多いと考えられた。手探りで始めた電子ブックの契約作業は，選書方法や契約条件が冊子図書や電子ジャーナルとも異なり，わからない点が多く困難をともなった。本稿では当館の電子ブック導入にあたって注意した点や，その後の運用事例を報告したい。

なお「オンライン学術用語集」[1)]の図書館情報学編に，1997年に“電子図書”という用語が掲載されている。他にも一般的に“電子書籍”や“e-Book”等多くの表記が用いられるが，本稿の記述は，広く普及している“電子ジャーナル”に倣い“電子ブック”に統一した。

Ⅱ．報告の目的

本稿では，当館の電子ブック導入事例を紹介することにより，“導入を検討している図書館の参考になる事例を示すこと”，そして“既に導入している図書館や電子ブックを扱う出版社・代理店と，電子ブックの情報や課題点を共有していきたい”という2点を目的としている。また電子ブックの導入を検討するにあたり，過去の導入事例を探したが，求める内容が見つからなかったことも，本稿をまとめるきっかけとなっている。

Ⅲ．電子ブックのメリットとデメリット

電子ブックには，冊子図書にない多くの特徴がある。利用者と図書館の視点から，それぞれを整理する。

1．利用者へのメリット

利用環境では，学内LAN接続環境下において場所と時間を問わずにアクセス可能であり，キャンパスや附属病院・研究所からも利用可能なこと。さらにリモートアクセスが可能な電子ブックは，自宅や外勤先からも利用可能であることが挙げられる。

機能面では，著作権の範囲内で本文・図表のコピーやダウンロードが可能であること，本文内の全文検索や搭載されている電子ブックの横断検索により必要な記述を容易に探し出すことが可能なこと，辞書検索機能を搭載していることが挙げられる。

利用面では，冊子図書のように貸出中や行方不明により利用に支障をきたさないこと（同時アクセス数に制約のある場合あり），カスタマイズや書き込みといった冊子図書に近い利用が可能であること（要アカウント登録），そして年間購読型の電子ブックでは常に最新の情報が提供されるうえ，冊子図書の発行に先駆けて情報を得られる場合があることが挙げられる。

2．利用者へのデメリット

まず，冊子図書に比べて購読タイトル数が少ないことが挙げられる。当館では図書館学内専用ウェブサイトで購読タイトルを公開しているが，OPAC・電子ブックリスト・アイコンと複数の入り口を用意したため，契約中のタイトルを探しづらい状態である点も挙げられる。

図らずも導入直後の2011年3月11日に東日本大震災があり，停電時やネットワーク障害時には，電子ブックをはじめとする電子情報に全くアクセスできなくなる可能性が考えられた。図書館資料の電子化が進むなか，電力や通信といったインフラに依存せざるを得ないという点も，見逃せないデメリットであると感じた。

3．図書館のメリット

実務では，貸出・返却・督促といった閲覧に関する作業や，受入・除籍といった財産管理が不要であること，

1) Yasuhiko KIYAMA：ヘルスサイエンス情報専門員（上級）
〒113-0033 東京都文京区本郷2-2-26.　kiyama@juntendo.ac.jp
2) Naoko MIZUSHIMA　weather@juntendo.ac.jp

（2011年9月15日　受理）

Presented by Medical*Online

蔵書点検の対象資料にならないこと，また閲覧統計データを得られることが挙げられる。

選書では，複数のキャンパスや病院・研究所で閲覧可能なため，複本の購入が不要となる。また電子ブックは物理的なスペースを必要としないため，書庫スペースの節減が可能である。

4．図書館のデメリット

購読では，冊子図書と比べて高額なタイトルがあること，買い切り型契約であっても一部で年間アクセス料金が毎年継続して必要になること，年間購読型の電子ブックは毎年継続して購読料金が必要になるといった点に注意を要する。また電子ジャーナルと共通するが，図書館の所蔵ではなく契約サイトにアクセスするため，永続的なアクセスの保障に不安を感じる点が挙げられる。

タイトルでは，購入希望タイトルが必ずしも電子ブックで発行されておらず，特に医学系の和図書が少ない点が挙げられる。電子ブックのタイトル数は増加しているとはいえ，個人向けと図書館向けに提供される電子ブックは現時点で別物であり，図書館では導入できないタイトルが数多くある。また年間購読型の電子ブックで予告なく新版に差し替わるタイトルがあるが，これは利用者にはメリットであるが，図書館ウェブサイトで独自に作成している電子ブックリストでは，定期的にタイトルや版を確認して更新していく必要がある。出版情報では，複数の出版社をまたいだ網羅的な収載タイトルリストや新刊案内がなく，ベンダーや出版社が発信する情報を個々に確認する必要があり，刊行状況を把握しづらい。

Ⅳ．電子ブック導入経緯と購読タイトルの選定

1．導入経緯

経常補助金「教育・学習方法等改善支援」の目的に沿った執行の一環として，電子ブックの導入を検討した。検討当時，契約している臨床医学系総合情報プラットフォーム（MD Consult）に閲覧可能な電子ブックが搭載されていたが，今回は初めて電子ブック自体を導入することにした。選書指針は2つで，導入時に次年度以降の予算継続の裏付けがなかったため“買い切り型を中心に契約”すること，検討段階で医学系和図書の電子ブックが少ないことが判明したため“洋図書を中心に選書”することである。限られた予算内で最大限の利用効果を出すため，出版社が展開するパッケージ・コレクションは選書対象から外し，可能な限り個別タイトルにより選書・購入することにした。後に代理店営業担当者から聞いたが，当館のような導入例はあまりみられないとのことであった。

2．選書

本学で必要とされる洋図書タイトルの裏付けを得る目的で，2010年12月に学内各部署に対して選書アンケートを行った。選書の参考に資するため，推薦するタイトルには以下のいずれかの付与を求めた。

①当該分野でのスタンダードな“権威ある”テキスト
②シラバスや教育要綱に掲載しており，“図書館に置いておくべき”学生に読んでもらいたいテキスト
③研究室や医局に備えておくべき“必須な”実用テキスト・マニュアル

また選書アンケートで挙げられたタイトルを補完する目的で，他大学の推薦図書リストを確認した。中でも名古屋大学附属図書館医学部分館の「名古屋大学医学部推薦図書目録 2010」[2] が網羅的にまとめられており参考になった。先方の許可を得て選書の参考資料とし，結果的に数タイトルを選書対象に追加した。

次に選定の参考データとして，推薦図書として挙がったタイトルと，「名古屋大学医学部推薦図書目録 2010」掲載タイトルについて，**表1**の情報を調査した。

表1．選書の参考データ

NACSIS-CATのタイトル表記（TR） ※著者名を冠するか，副書名の有無等を確認
最新版（edition）
冊子図書のVolume数，合計ページ数
編著者名
出版者名
刊行年
当館の冊子図書所蔵状況 ※旧版・訳本の所蔵を含む
冊子購入価格（主要書店の日本円建て価格）
冊子図書価格に対しての電子ブック価格（%表記）
NACSIS-CAT所蔵館数
提供するプラットフォーム ※契約中のプラットフォーム（MD Consult）で提供されているタイトルはあるか？

3．電子ブックの機能について

医科系大学図書館のウェブサイトを確認し，各館で契約している電子ブックの傾向を概観した。次に当館の購読候補となる電子ブックをリストアップし，それらを扱う販売者や代理店を調査した。代理店には2010年12月に，取り扱いのある電子ブックの機能についてアンケー

Presented by Medical*Online

トを依頼した。内容は導入にあたって知りたい点が中心であり，**表2**の項目について回答を依頼した。結果をまとめ，図書館運営委員会での検討資料とした。

表2. 電子ブックの機能について

検索	全文検索，プラットフォーム中の横断検索
	検索結果の保存
	外部データベースとの連携
	個人アカウントの設定
閲覧	Full text形式 or PDF形式
	テキストコピー可否，ダウンロード可否（可の場合は制限値）
	印刷物への透かし or 製品名の記載
	画像コピー可否（可の場合は解像度）
	動画・音声機能の有無
	マーカー機能，メモ機能
	辞書・外部リンク設定
	ブックマーク機能
	プラットフォームの言語
	文献管理ソフトとの連携
	専用リーダーの有無
利用条件	同時アクセス数 制限がある場合，予約アラートの有無 アクセス数変更が可能な場合は，その条件
契約形態	買い切り型：永続アクセス保障条件，年間アクセス料金の有無，割引プラン
	年間契約型：翌年以降の購読条件
	その他の購読形式
コレクション	提供タイトル数
	パッケージ・コレクション（テキストブック，レファレンス，分野等）
	アグリゲータ系プラットフォームの場合，主要出版社発行タイトルの収録状況 ※購入予定の洋書出版社名を提示し，その収録状況を確認
管理・運用	IP認証 or Password認証
	リモートアクセスの可否
	相互貸借への使用可否
	閲覧統計の提供 データ項目，COUNTER準拠であるか Webで随時取れるか or 提供頻度
	リンクリゾルバとのデータ連携の可否

4．トライアルと利用対象者へのアンケート

提供タイトルや購読条件を考慮し，タイトルごとに契約候補となるプラットフォームを選定した。そして2011年1月後半から1か月間，3つのプラットフォームについて，図書館学内専用ウェブサイトにおいてトライアルを行った。トライアル可能なタイトルに制約があるプラットフォームには，代理店に特定のタイトルや章を指定して追加で閲覧可能になるように依頼した。同一のタイトル・章を複数のプラットフォームで閲覧することで，機能を比較してもらうことが目的であった。

またトライアル期間に合わせて，利用対象者に電子ブックに関するアンケート調査を行った。短期間であったが30名（有効回答数29）から回答が寄せられた。アンケートの主目的は契約先の優先順位を付けることであったが，併せて電子ブックの「用途」と「機能」について最も重視する点についても尋ねた。回答者の属性により，基礎医学，臨床医学，全体と3つに分けて結果を示す。なお，契約先の優先順位は本稿では割愛する。

1）主な用途について（図1）

ともに「教育」が大半を占め次いで「研究」と，上位は同一となった。基礎医学で「診療」の用途が現れないのはともかく，「調べもの」も現れなかった。

2）重視する機能について（図2）

ともに「探しやすさ」が半数を占め，次いで「モニター上の読みやすさ」が基礎医学でより多く求められていた。「保存しやすさ」は基礎医学では挙がらないが，臨床医学では2番目に挙げられている点が異なる。

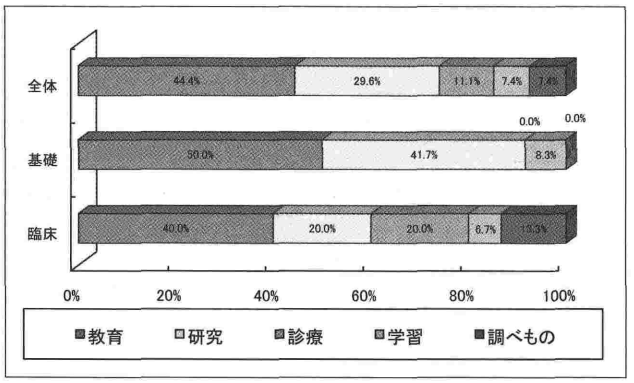

図1. 電子ブックの主な用途

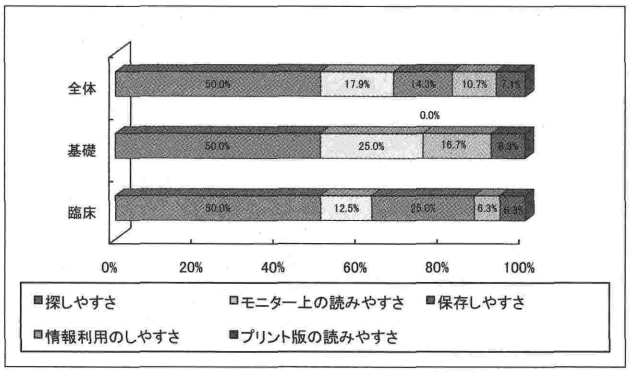

図2. 電子ブックで重視する機能

Presented by Medical*Online

5．購読タイトルの決定

同一のタイトルが複数のプラットフォームで提供されている場合，先の利用者アンケートの結果に基づく優先順位により購読先を決定した。今回は優先順位によって購読先を決定し，価格と利用条件は参考情報に留めた。契約に関して留意した点は，次項「V．電子ブックの契約で留意した点」で取り上げる。

結果的に，購読を希望したタイトル数の30%弱しか電子ブックを購入できない結果となった。購入できなかったタイトルは電子化されていないタイトルがほとんどであるが，中には旧版のみ電子化されているタイトルや，契約条件を満たせないために購入できなかったタイトルが少数ながらある。同一タイトル・版の冊子図書を所蔵するタイトルも，新たに電子ブックを購入した。当初は買い切り型のみでの契約を目指したが，一部で年間購読型のタイトルを購読せざるをえなかった。買い切り型での提供がないタイトルであることが理由であり，当面1年間限定の契約とし，その後の継続については利用動向等を考慮して判断することにした。

6．ウェブサイトでの公開

契約手続きが完了した電子ブックは，図書館学内専用ウェブサイトで公開している。電子ブックリストは，アルファベット順で冠詞・定冠詞を除いたタイトルも掲載した「タイトル順リスト」と，冊子図書と同様の米国国立医学図書館分類（NLMC）を用いた「分類順リスト」の2種類を用意した。利用が多いと思われるコアなタイトルについては，トップページにアイコンを表示して，直接アクセスできるようにした。

V．電子ブックの契約で留意した点

電子ブックの契約にあたり，留意した点を整理したい。

1．契約タイトルに関する点

購読タイトル選定で留意したことは，以下の特徴を生かして契約することであった。

1）タイトルの選定（個別タイトル or パッケージ）

個別タイトル契約は，冊子図書と同様にタイトルごとに選択して購読する方式である。電子ブックの刊行は冊子図書の刊行時期と必ずしも一致しないため，最新版が電子ブックで提供されているか，また近々改訂が予定されているか確認が必要である。導入時に一定の購読条件を求める出版社があり（例えば初回契約xxタイトル以上，合計金額xxx.xxx円以上等），購読を希望しても条件を満たさなければ購読できない場合がある。

パッケージ・コレクション契約は，プラットフォームや出版社が展開する，コレクション単位でセット販売する方式であり，電子ジャーナルのビッグディール契約のイメージと重なる。タイトルのくくりとして，一定の評価を得たタイトル，当該出版社から年間に発行されたタイトル，分野によるタイトル，売上好評タイトル等，さまざまな組み合わせが提供されている。1タイトルあたりの単価は割安になるが，購読金額はまとまった金額となる（タイトルのバラ売りが可能な場合あり）。パッケージの中には当館で必要度が低いと思われるタイトルも多く含まれるため，今回は積極的に導入しなかった。

2）出版社系とアグリゲータ系

電子ブックのプラットフォームには，当該出版社の出版物のみを扱う“出版社系”と，複数の出版社のタイトルを搭載した“アグリゲータ系”がある（Books@Ovid, ebrary, MyiLibrary, NetLibrary（EBSCOhost eBook Collection）等）。購読希望タイトル数が少ない出版社が刊行する電子ブックの場合，アグリゲータ系の電子ブックを契約すれば，契約するプラットフォーム数が少なくて済み利用も管理も楽になる。ただし一部の出版社では，独自のプラットフォームでの積極的な展開を始めており，アグリゲータ系への提供を控えていると思われる事例が確認できた。双方の使い分けが必要であると感じた。

2．閲覧可能範囲

プラットフォームによって，アクセス可能なサイト範囲の定義が異なっていた。もっとも狭い単位となるキャンパスのみから，全学で利用可能なものまであり，それぞれにおいて確認が必要である。またアクセス可能なサイト数や機関規模（FTEや病床数等）により，購読金額が変動するベンダーもあった。その場合は閲覧可能な範囲を考慮したうえで，契約することになる。

3．契約形態に関する点

調査した範囲内で，電子ブックの購読モデルには以下のものがあった。今回は購入タイトルを限定して導入したため，3）と4）の契約形態では購読していない。

1）買い切り型

購入すれば永続的なアクセスが可能となる，冊子図書の購入に似た契約形態。ただし次年度以降に年間アクセス料金が必要となるプラットフォームもある（中には買い足しによる減免があるものもあり）。冊子図書と同様，新版刊行時は，新版を購入しないと利用できない。

Presented by Medical*Online

2）年間購読型

アクセス可能な契約期間が限られる，電子ジャーナルに似た契約形態。継続して閲覧するためには，次年度以降にも契約が必要となる。契約期間中は常に最新の情報が提供されるが，同時に旧版は参照できなくなる。

3）利用者主導の見計らい購入モデル

一部のタイトルを公開して，利用状況を基に，利用された図書を自動的に購入する方式。

4）短期間リースモデル

一定期間有料にて利用可能なタイトルを設定し，その後図書館が利用状況等により買い切りを判断する方式。

4．代理店の選定に関する点

電子ブックを扱う出版者や代理店を，ウェブサイト等により確認する。また図書館において，電子ジャーナルやデータベース等，同一の出版者や代理店との契約が既に発生していないかを把握しておく。電子ブックは，同一の出版者・代理店から購読した方が，連絡や契約手続きにおいて管理しやすいと思われる。

Ⅵ．まとめ

まとめとして，“図書館の課題”と“ベンダーや代理店に望みたいこと”の2つに整理して記したい。

1．図書館の課題

1）継続した導入

一度導入して終わりとせず，冊子図書と同様に，継続的な予算立てを計画して，電子ブックによる蔵書構築を検討していくことが必要であると感じる。

2）アクセス経路の整備

利用者アンケートで挙がった“探しやすさ”への対応である。図書館ウェブサイトに電子ブックリストを掲載することやOPACに搭載することはもとより，図書館で契約中の電子リソース（電子ジャーナル・電子ブック・データベース）の統合検索を可能にする，マネージメントツールの導入についても検討していきたい。

3）電子ブックの利用のされ方の把握

冊子図書と電子ブックにおける，利用の違いを把握する。最初から最後までを通読する図書よりも，学術書やレファレンスブックといった，必要な個所のみを“つまみ読み”する図書の方が，電子ブックの利用に向いていると感じる。また年間購読型タイトルでは，利用統計を活用して次年度以降の購読継続を判断する。

参考までに，電子ブックと冊子図書の利用統計を比較した事例を報告する。本学において冊子図書と電子ブックで同一のタイトル・版を所蔵する“Harrison's Online”と“Harrison's Principles of Internal Medicine, 17th ed. 2008”を例にとる。年間契約型の電子ブックであるが，定評のあるコアテキストで複数の部署から推薦があり，図書情報の他にオリジナルの情報が掲載されているため例外的に購読した。**図3**は2011年3月以降のOnlineアクセス回数である。一方で同時期の冊子図書の貸出回数は，洋書は0回で2分冊の和書2セットは合計9回に留まった。電子ブックは洋書のみ閲覧可能だが，圧倒的に多く閲覧されていることが確認できた。2011年3月は東日本大震災の影響を大きく受けた時期であるが，導入直後ということもあり数多く利用されていた。

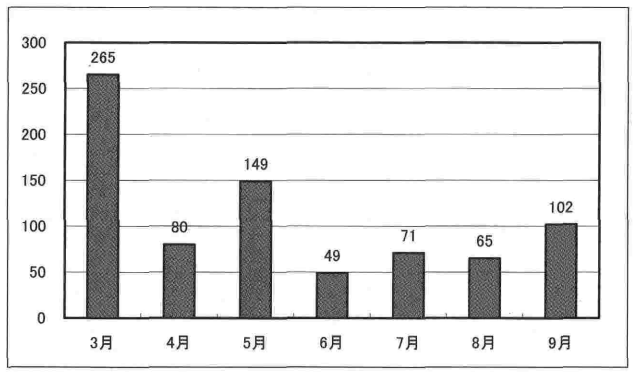

図3．電子ブックHarrison's Online月間アクセス回数 2011年3月から2011年9月（単位は件数）

4）利用対象者への広報

現時点では残念ながら，利用者に広く電子ブックが認知されていない状況である。図書館ウェブサイトでの告知は行っているが，各講座（主任教員・図書担当委員）へのメールやチラシによる広報，教授会等での定期的な会議報告等，各方面から広報を展開していきたい。

5）各キャンパス図書館や各附属病院・研究所との連携

キャパス図書館間で，主題分野による選書の棲み分けや，予算の分担が可能となる。本学は医学（医学部）・スポーツ健康科学（スポーツ健康科学部）・看護学（医療看護学部・保健看護学部）とキャンパスにより主題が分かれており，分野を超えた学術交流が特色である。また各キャンパスや病院・研究所で，共通して閲覧可能な学内ネットワーク環境の構築も必須である。

6）モバイル環境

従来の電子リソースはPCでの利用を想定していた。利用者からは携帯型端末でも図書館資料を閲覧できるようにして欲しいという意見が寄せられており，環境整備

Presented by Medical*Online

が求められている。また図書館においても，新しい環境下での利用状況や環境について，柔軟に対応する体制が必要であると感じる。

7）相互貸借での利用

電子ブックの浸透により他館の蔵書が見えづらくなった印象があり，今後は相互貸借での対応が難しくなるのではないかと感じた。ILLでの対応は各ベンダーにおいても検討されているようで[3]，今後の進展が待たれると同時に，図書館側からの発信も必要と思われる。

2．ベンダー・代理店へ望みたいこと

1）有用なタイトルの提供

何よりも，冊子図書と同様，和図書，各分野のコアテキスト，専門学術書，レファレンスツールといった，利用者に必要とされるコンテンツの拡充が望まれる。

販売側からの新刊案内を見ていると，個別タイトルではなくパッケージでの一括販売を望んでいる印象を受ける。パッケージ・コレクションは利用者にはタイトル数のスケールメリットにより利用価値が高まるのであろうが，図書館としては，まとまった金額を費やしてある程度継続して購入せざるを得ないという点に難しさを感じる。しかも先に記したように，必要度が低いと思われるタイトルにも費用を捻出し続けることになるため，契約に踏み出すことができなかった。冊子図書と電子ブックでは使われ方が違うため，それぞれに適した選書や購入方法があるべきと思うが，もう少し各館の事情に合わせられる，きめ細やかな選択が可能であればよいと感じた。

2）永続的なアクセス権の保障

買い切り型の電子ブックでは，出版社やプラットフォームが移行しても，継続してアクセス可能な環境を維持して欲しいと願う。導入後に出版社の買収や統合によりプラットフォームが変更になり，カスタマイズした書き込み機能等が利用できなくなるといった使い勝手に変化が起きている。マイナス面は，利用者のデメリットにならないような変化に留めて欲しい。

3）各種機能について

出版者・代理店側で，電子ブックの基本的な機能について，すぐに説明できるように現状把握をしておいて欲しいと感じた。前述のアンケートの質問時に，海外の本社に確認を取らないと回答いただけないプラットフォームが複数あった。またプラットフォームの表記やアラート通知の日本語対応や，検索機能での日本語の正字率の向上といった日本向けの展開も望みたい。また，モバイルでも閲覧できる環境を整備して欲しい。利用統計では独自の特徴あるデータ項目を採用するプラットフォームも存在するが，COUNTER等の標準化された閲覧統計に集約されていくことを望みたい。

4）提供タイトルの公開

選書の過程で痛感したが，提供タイトルと販売価格を，ウェブサイトで確認できるように整備して欲しい。個別に問い合わせないと，提供タイトルと価格が判らないプラットフォームがあり，収載状況の調査に手間取り，また代理店にも大変なお手数をおかけした。価格表記はプラットフォーム間で温度差がみられ，価格を含むデータ項目について，各プラットフォームで足並みをそろえた形での公表を望みたい。

また最新版の提供がなく旧版のみが提供されている電子ブックがあるが，冊子図書と電子ブックの発行のタイミングを明確にして欲しい。そして一部で版に対して意識が薄い印象が見受けられ，ウェブサイトに掲載された提供タイトルリストに版が表記されていないプラットフォームや，納品された電子ブックが旧版であり手続きをやり直した例があった。

5）新刊情報の通知

前述のように，各ベンダーや出版社をまたいだ形の“総合出版情報”がなく，それぞれが発信する情報を確認する必要がある。可能であれば，購入済のタイトル情報を基に，改版刊行時や類似図書刊行時に，アラート通知による新刊案内を送信して欲しい。またメール配信やウェブサイトでの刊行案内に日本語表記があればなお嬉しい。

3．まとめ

今回の電子ブック導入の取り組みは，本学における電子ブック・コレクションの基礎を形成する位置づけである。今後も継続的にタイトルを追加して，電子ブックがもたらすメリットを生かしつつ，これからの新たな図書館サービスのあり方を考えていきたい。なお本稿は当館で調査した範囲内の記述に留まるため，他に多くの点が存在すると思われるので注意されたい。そしてベンダーの具体的な評価については，当館の主観が入るため，記載を割愛したことを改めてお断りしておく。

購入タイトル決定後に，企業買収による契約の難航やプラットフォームが移動した電子ブックがあり，図らずも電子ブック市場自体が，まさに動いている状況を実感しながらの作業となった。また導入直後に発生した東日本大震災の影響により，停電やネットワーク遮断等の可能性が考えられ，電子ブックと冊子図書の持つ特徴と扱

Presented by Medical*Online

い方についても考えさせられた。現在は図書館における電子ブック導入の揺籃期であり，先に挙げた課題によっては，早い時期に解決されていくのではないかと感じている。利用者・図書館・代理店・提供元が情報を交換し合うことにより，より利用しやすい形で電子ブックが普及していくことを望むものである。

本稿は，2011年7月23日から24日にかけて滋賀県大津市のピアザ淡海で開催された，第28回医学情報サービス研究大会（MIS28京滋大会）でのポスター発表をもとに，加筆修正のうえまとめたものである。

本作業を進めるにあたり，櫻井隆図書館長（当時）からは一貫して指示・助言をいただきました。また代理店の営業担当者には，短期間に多くの依頼をさせていただいたにも関わらず，迅速にご対応いただきました。この場を借りて，改めて御礼申し上げます。

参考文献

1）国立情報学研究所　オンライン学術用語集図書館情報学編[internet]. http://sciterm.nii.ac.jp/cgi-bin/reference.cgi [accessed 2011-09-13]
2）名古屋大学医学部推薦図書目録 2010[internet]. http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/holding/suisen/index.html [accessed 2011-09-13]
3）国立国会図書館．電子書籍時代のILLはいずこへ？（記事紹介）．カレント・アウェアネス-R. 18945.[internet]. http://current.ndl.go.jp/node/18945 [accessed 2011-09-13]
4）特集．電子ブック．医学図書館．2006;53(4):357-84.
5）特集．電子図書と電子図書館．図書館雑誌．2011;105(6):368-84.
6）国立国会図書館．電子書籍の流通・利用・保存に関する調査研究[internet]. http://current.ndl.go.jp/files/report/no11/lis_rr_11_rev_20090313.pdf [accessed 2011-09-13]
7）University of California Libraries. UC Libraries Academic e-Book Usage Survey: Springer e-Book Pilot Project[internet]. http://www.cdlib.org/services/uxdesign/docs/2011/academic_ebook_usage_survey.pdf [accessed 2011-09-13]
8）国立国会図書館．ポスドクの半数は電子書籍を好む　カリフォルニア大学，教職員・学生を対象にした電子書籍のユーザ調査報告書を公開．カレント・アウェアネス-R. 18453.[internet]. http://current.ndl.go.jp/node/18453 [accessed 2011-09-13]
9）東京工芸大学．調査結果ニュースリリース　東京工芸大学，電子書籍に関する意識調査[internet]. http://www.t-kougei.ac.jp/guide/images/pr110615.pdf [accessed 2011-09-13]
10）湯浅俊彦．電子書籍の動向と図書館の役割[internet]. http://www.shuppan.jp/general/337-2010-09-10-05-41-24.html [accessed 2011-09-13]

What Should be Taken into Consideration When Selecting E-books?: A Case Study at Juntendo University Library

Yasuhiko KIYAMA, Naoko MIZUSHIMA

Juntendo University Library. 2-2-26 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

Abstract: In 2010, the Juntendo University Library attempted to increase the number of E-book titles. E-book subscriptions have many different terms and conditions, as well as categories such as e-journals, books and book selection processes. This new process has introduced many difficulties and points of discussion. This report will address points of note regarding the library's selection of e-books, as well as case reports and subsequent results (processes).
(*Igaku Toshokan*. 2011;58(4):297-303)

Presented by Medical*Online